

「第二十一回庭野平和賞」 庭野日鑛総裁あいさつ

本日は、「第二十一回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、多くのご来賓のご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。庭野平和財団は、昨年五月、庭野平和賞が二十回を迎えた記念事業として、十人の宗教者によって構成される「庭野平和賞委員会」を設立いたしました。今回の「第二十一回庭野平和賞」は、「庭野平和賞委員会」によって選考された初めての受賞団体であります。

この記念すべき「庭野平和賞」を、東アフリカのウガンダで紛争解決、人権擁護、異なる民族間の平和共存などに取り組んでこられた「アチョリ宗教者平和創設委員会」にお贈りできますことを、大変光栄に思います。

先ほどもご紹介がありましたように、「アチョリ宗教者平和創設委員会」は、カトリック、聖公会、正教会、さらにイスラームなどの諸宗教者によって構成される平和協力組織です。一九九八年に設立されて以来、約四百人のスタッフ、支援者がボランティアに従事し、非暴力による紛争解決、平和を創造する人材の育成、紛争被害者の救済などに取り組んでおられます。

現在、ウガンダ北部のアチョリ地域では、政府軍と「神の抵抗軍」と呼ばれる反政府軍の内戦が長期化し、破壊や略奪、殺害や暴行などが、日常化していると伝えられます。我が家を離れ、避難民キャンプでの生活を余儀なくされている人も少なくありません。

このような内戦の中で、特に大きな問題とされているのが、子供の誘拐だと伺っております。反政府軍によって誘拐された子供たちは、「少年兵」として扱われ、強制的に武器を持たされます。その数は、ウガンダ国内で二万人に及ぶといわれます。世界的にみましても、各地の戦争や紛争で、三十万人もの「少年兵」が存在すると推計されています。子供が、「子供らしく」生活するという、ごく当たり前のことさえ叶わない状況に置かれているのであります。

子供の頃の体験や記憶は、その後の人生に決定的な影響を及ぼすといわれます。まして、誘拐されたのち、武器を持って人を襲い、ときには殺人まで犯すという極限の体験は、子供の心にどれほど深い傷を残すことでありましょう。自由であるはずの子供の心を萎縮させ、社会や人に対する怒りや恨みの心を植えつけてしまうに違いありません。実際、「少年兵」を経験した子供は、たとえ故郷に帰ることができたとしても、社会復帰が非常に難しいといわれます。

「アチャリ宗教者平和創設委員会」は、こうした子供たちを保護し、身心を癒すための活動に取り組まれています。紛争は「怒り」の心から生まれます。人を傷つけることを強制された子供たちの心を癒すのは、その対極にある宗教的な「愛」と「慈悲」のほかにはありません。

「アチャリ宗教者平和創設委員会」のメンバーの一人がこう語られています。

「私たちは、単に人間による活動を行っているのではなく、神に協力しているのです」と。

この宗教的な信念に貫かれた「愛」によって、「少年兵」を経験した子供たちも、やがては必ず、本来の輝きを取り戻してくれると信じます。

いま、世界各地では、三十を超える戦争や紛争が行われています。また身近な社会生活でも、無数の争いが繰り返されています。その原因を突き詰めてみますと、人間の無知にいきつきます。あらゆる宗教は、等しく「生命の尊厳」を説きます。本来、すべての存在が大いなる一つのいのちであり、人間は皆、その一成員として生かされている兄弟姉妹です。だからこそ、すべてのいのちは等しく尊いのです。この真理を知らない、真理を探究する姿勢のないことが、争いを引き起こす一番の原因であり、人間にとっての最大の「罪」ではないかと思えます。

その意味で、「アチャリ宗教者平和創設委員会」は、すべてのいのちを尊重するという立場から、宗教の相違を超えて協力し、あくまで非暴力的手段を貫き、政府軍、反政府軍双方の信頼を得ながら、紛争の解決を目指しておられます。『みんなが平和への努力を』というモットーのもと、地域のリーダー、議会のメンバー、国内外のNGO、軍人、農民など、すべての人と共に行動することを重視されています。「皆が兄弟姉妹」という確信に基づいた、真に宗教的な

歩みであると申せましょう。

パレスチナ、イスラエル紛争、イラク戦争などをみましても、恨みの連鎖、暴力の連鎖は、とどまることを知りません。「自分は善」「相手は悪」と決めつけ、相互に自己主張を繰り返し、攻撃し合っています。しかし仏教では、苦の原因を相手にではなく、自らの内に見出そうとします。人間は決して完全ではありません。愚かさ・怒り・貪りなどの心は、誰もが持ち合わせています。むしろ、平和を乱す元凶は自分ではないか、という徹底した内省、サンゲを通してこそ、対立を超え、相互の信頼を醸成することができるかと教えています。

今回の庭野平和賞を通し、私たちは、こうした恨みの連鎖、暴力の連鎖を断ち切るため、いのちをかけて取り組む「アチョリ宗教者平和創設委員会」の働きを、改めて深く知ることができました。法華経に「地湧の菩薩」——大地から湧き出てくる菩薩——が説かれています。苦悩の多い現実の生活を体験する中で仏の法を楽(ねが)い、黙々と精進して、無上慧を求めている人々のことです。釈尊は、この「地湧の菩薩」に娑婆世界の救いを任されました。私は、「アチョリ宗教者平和創設委員会」の皆さまこそ、ウガンダに於ける「地湧の菩薩」だと信ずるのであります。

紛争の解決は、政治的、民族的な問題というより、一人ひとりの「いのちの尊厳」の自覚を守る道のりであります。本日の贈呈式を契機として、「アチョリ宗教者平和創設委員会」の皆さまが、信頼の輪を広げられ、ウガンダに一刻も早く真の平和が訪れますことを祈念し、あいさついたします。

皆さま、ありがとうございました。